ありふれない提督は世界最強

星野楓

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もし、あの召喚の時。一緒に、提督や艦娘も転移していたら……

そんなＩＦです。

なお、ハジメ達の世界と艦娘達の世界は違うものとする。

そして、ハジメの世界には艦これがないとする。

目次

転移と艦娘と戦争 ―― 1
王国とステータスプレート ―― 11
鈴と鈴奈 ―― 26
鈴と鈴奈2 ―― 31
鈴奈と光輝 ―― 37
鈴奈とオルクス大迷宮前夜 ―― 46
鈴奈とオルクス大迷宮 ―― 49
島風と檜山 ―― 60
鈴奈と奈落 ―― 64
島風と光輝と映像 ―― 70
夕立と時雨、電と響 ―― 77
夕立と電、あきつ丸と檜山 ―― 84
レ級襲来！ ―― 88
対レ級作戦、開幕なのです！ ―― 93
オルクスでの死闘 ―― 97
鈴奈の考察と反逆者 ―― 102
電と夕立と雪風と響と時雨 ―― 105
再会の時 ―― 108
閑話：鈴奈の独白 ―― 112
再会。 ―― 116

転移と艦娘と戦争

《榛名サイド》

私達は、何時ものように、提督さんと間宮さん、伊良子さんが作るお昼を食堂で食べていました。

今日は出撃はお休みですし、オフでしたので。

そして、提督さんが何か言おうとしたとき。ピカっと白い光が出たと思ったら。私達は、知らない場所にいました。

周りに、子供がいるところに。

よく見ると、男の子や女の子（私達を除いて）の服は同じものでした。…学校の人？にしては教室とやらではありませんしって、なんなのでしょうか、アレは。提督が見せてくれたものは、変なものでした。

《提督サイド》

目を開けると、私と榛名、時雨、雪風と大和以外はいなかった…なぜ？いや、いるか。子供だが。うん？なんでしょうか、あの絵画は。変な人が、いる。どうやら何かに巻き込まれたようだ。

私はそれを把握した。
と、男の子が見てきた。ああ、誰なのか、と考えているんだろう。きっと。とりあえず、ニコっと微笑んでおこう。
《ハジメサイド》
光が収まって目を開けると、目の前に白い軍服？のようなものを着て、胸に勲章をつけた女の人がいた。
いや、なんでこんなところにいるんだ？グルなのか？
《提督サイド》
うん？誰か来るらしい。
靴の音がする。
法衣っぽいものを着たお爺さんだ。
「ようこそ、トータスへ。勇者様、そしてご同胞の皆様。歓迎いたしますぞ」
うん。胡散臭い。
「私は、聖教教会にて教皇の地位に就いております、イシュタル・ランゴバルドと申す者。以後、よろしくお願いしますぞ」
？えっと、イシュタルってギルガメッシュに出てくる女神？だったら笑えるね。
私達は移動して、長いテーブルがある部屋について、座っている。

上座の方に先生っぽい人を四人組、その次に…という順番だ。…私達一応この勇者御一行？とやらの中で階級が一番高い気がするけど、まあいいや。一番下座でもな！

なお、席順は、向かいの席の左から、時雨、大和、さっきの男の子、こちらの左から雪風、私、榛名というか順だ。うん、男の子…ハジメというらしい…頑張れ。女の子が見てるし、男の子からもうらやまけしからんという目で見られてるけど。

話が進むらしい。あのイシュタルとやらが話はじめる。

「さて、あなた方においてはさぞ混乱していることでしょう。一から説明させて頂きますのでな、まずは私の話を最後までお聞き下され」

そう言って始めたイシュタルの話は実にファンタジーでテンプレで、どうしようもないくらい勝手なものだった。

要約するとこうだ。

まず、この世界はトータスと呼ばれている。そして、トータスには大きく分けて三つの種族がある。人間族、魔人族、亜人族である。

人間族は北一帯、魔人族は南一帯を支配しており、亜人族は東の巨大な樹海の中でひっそりと生きているらしい。

この内、人間族と魔人族が何百年も戦争を続けている。

魔人族は、数は人間に及ばないものの個人の持つ力が大きいらしく、その力の差に人

間族は数で対抗していたそうだ。戦力は拮抗し大規模な戦争はここ数十年起きていないらしいが、最近、異常事態が多発しているという。

それが、魔人族による魔物の使役だ。

魔物とは、通常の野生動物が魔力を取り入れ変質した異形のことだ、と言われている。この世界の人々も正確な魔物の生体は分かっていないらしい。それぞれ強力な種族固有の魔法が使えるらしく強力で凶悪な害獣とのことだ。

今まで本能のままに活動する彼等を使役できる者はほとんど居なかった。使役できても、せいぜい一、二匹程度だという。その常識が覆されたのである。

これの意味するところは、人間族側の〝数〟というアドバンテージが崩れたということ。つまり、人間族は滅びの危機を迎えているのだ。

「あなた方を召喚したのは〝エヒト様〟です。我々人間族が崇める守護神、聖教教会の唯一神にして、この世界を創られた至上の神。おそらく、エヒト様は悟られたのでしょう。このままでは人間族は滅ぶと。それを回避するためにあなた方を喚ばれた。あなた方の世界はこの世界より上位にあり、例外なく強力な力を持っています。召喚が実行される少し前に、エヒト様から神託があったのですよ。あなた方という〝救い〟を送ると。あなた方には是非その力を発揮し、〝エヒト様〟の御意志の下、魔人族を打倒し我ら人間族を救って頂きたい」

イシュタルはどこか恍惚こうこつとした表情を浮かべている。おそらく神託を聞いた時のことでも思い出しているのだろう。

イシュタルによれば人間族の九割以上が創世神エヒトを崇める聖教教会の信徒らしく、度々降りる神託を聞いた者は例外なく聖教教会の高位の地位につくらしい。

……つまり、戦争させろ、と。へえ。いいわ。反対させてもらうから。

…突然立ち上がり猛然と抗議する人が現れた。

先生らしい。

「ふざけないで下さい！　結局、この子達に戦争させようってことでしょ！　そんなの許しません！　ええ、先生は絶対に許しませんよ！　私達を早く帰して下さい！　きっと、ご家族も心配しているはずです！　あなた達のしていることはただの誘拐ですよ！」

ハジメくんから、あの人達の名前を聞いた。

確かにそうだ。だが、おそらく帰ることはできないであろう。

って、ヤバイ。絶対にヤバイ。だって、私達は…軍についているから。間違いなく、上に何かされるし、次の作戦で、総指揮官となるのだ。それまでに帰らなければ……

しかし、次のイシュタルの言葉に凍りついた。

「お気持ちはお察しします。しかし……あなた方の帰還は現状では不可能です」

場に静寂が満ちる。重く冷たい空気が全身に押しかかっているようだ。誰もが何を言われたのか分からないという表情でイシュタルを見やる。

「ふ、不可能って……ど、どういうことですか!?　喚べたのなら帰せるでしょう!?」

先生が叫ぶ。

「先ほど言ったように、あなた方を召喚したのはエヒト様です。我々人間に異世界に干渉するような魔法は使えませんのでな、あなた方が帰還できるかどうかもエヒト様の御意思次第ということですな」

「そ、そんな……」

先生が脱力したようにストンと椅子に腰を落とす。周りの生徒達も口々に騒ぎ始めた。

「うそだろ?　帰れないってなんだよ!」

「いやよ!　なんでもいいから帰してよ!」

「戦争なんて冗談じゃねぇ!　ふざけんなよ!」

「なんで、なんで、なんで……」

パニックになる生徒達。

はあ。いっちょ言いますか…と思ったら。

とある生徒が立ち上がった。

「皆、ここでイシュタルさんに文句を言っても意味がない。彼にだってどうしようもないんだ。……俺は、俺は戦おうと思う。この世界の人達が滅亡の危機にあるのは事実なんだ。それを知って、放っておくなんて俺にはできない。それに、人間を救うために召喚されたのなら、救済さえ終われば帰してくれるかもしれない。……イシュタルさん？　どうですか？」

「そうですな。エヒト様も救世主の願いを無下にはしますまい」

「俺達には大きな力があるんですよね？　ここに来てから妙に力が漲っている感じがします」

「ええ、そうです。ざっと、この世界の者と比べると数倍から数十倍の力を持っていると考えていいでしょうな」

「うん、なら大丈夫。俺は戦う。人々を救い、皆が家に帰れるように。俺が世界も皆も救ってみせる!!」

は？何を言っているんだ、コイツは。コイツは戦争というものをわかっていない。教科書で習うだけのものとしか考えていない。いや、むしろ、人をヤルと認識していないのか。

「へっ、お前ならそう言うと思ったぜ。お前一人じゃ心配だからな。……俺もやるぜ？」

「龍太郎……」
「今のところ、それしかないわよね。……気に食わないけど……私もやるわ」
「雫……」
「え、えっと、雫ちゃんがやるなら私も頑張るよ！」
「香織……」
もう我慢ならない。バンと音と立て、立ち上がった。
みんなが注目する。
と、榛名達も意思がわかったようで立った。
「私は反対。あなたたち。戦争、というものを理解しているの？」
「お前は誰だ！」
光輝、というやつがいう。

「私は、日本国海軍所属、タウイタウイ泊地所属の提督、星　鈴奈よ。階級は、中将よ」
「は？何を言っているんだ？海軍？嘘をつくな」
……話が噛み合わない。
「…榛名」
「なんでしょう」

「ちょっと証拠見せてあげて」
「了解いたしました、提督」
……榛名証拠である階級章を見せると、理解したようだった。
「っ、で、でもなんだ、その女の子は。まさか、そんな小さな子を戦わせるのか？非人道だ！」
「しれえ。小さい子って私や時雨ちゃんのことですか？」
「うん。そうだと思うけど、とりあえず置いとこうか。さて。なんで私が立ち上がったというと……
あなた達が戦争することをちゃんと理解していないから。ね、大和」
「はい。私にもそう見えました」
「ここにいるのは、大和、榛名、時雨、雪風。さて。分かる人には分かると思うけど」
「……は？」
「は？じゃないわ。あのね。戦争というものは、人をヤルということよ。まぁ私達は人じゃなくて深海棲艦だったけど。まぁ変わらないわ」
「イシュタルさん。魔じん族のじんってなんてかくんですか？」
「え？ああ……《人》じゃよ」
「なっ」

「改めて言うわ。私達は反対よ。訓練に参加は……まあ天龍達が行くかもしれないけど基本的に希望者だけ。実践的な訓練もしっかりとしてから、希望者のみ。実戦も。と言うのを希望するわ」
「なんだと……まあ、良い。その代わり、さっきの人達は強制参加。それでよろしいかの？」
「……はあ。仕方ない。それで手を打ちましょう」

王国とステータスプレート

ああは言ったものの、この山…【神山】の麓にある国、ハイリヒ王国にて受け入れが決まっているらしい。

教会から出て、少し歩くとなんか凄い門があり、そこをくぐると、雲海が広がっていた。

「ほわあ……きれいなのです」

そう言ったのは電。どうやら出てきたり帰ったりできるようだ。

……いや、どこにだよ。

そう電に聞くと、

「なんか佐世保鎮守府と違う場所に鎮守府があったのです。何故か繋がってるのです」

と言っていた。

鈴奈は思考停止した。

そんな会話をしているうちに、なんかかいてある台座の上に立っていた。

すると、イシュタルが、

「彼の者へと至る道、信仰と共に開かれん――〝天道〟」

と唱えた。
台座がロープウェイのように動いたので、
（ああ、こう言う演出なんだなー）
と思った。
わたしは、こんなもの見たことがなかったから、すごいなと思ったよ、■■■■■■■
地上に着くと、王宮があった。
王宮に入ると真っ先に王の間に案内された。
王の間の前で、兵がイシュタルと勇者一行が来たことを告げ、返事を待たずに扉を開け放った。
鈴奈は、ああ、王よりもイシュタルの方が上なんだなと思った。
その後、色々あってー王子がチラチラと大和や榛名などを見たりジーと見つめたりしたので、武蔵が来て姉に何か？と言ったので慌てて止めたり金剛も来ていた―いつのまにか寝ていた。
翌日。
どうやら一番初めの座学は全員らしい。
なお、私（鈴奈）にとってはつまらないものだろうと思っていたのだが、全然違った。
「よし、全員に配り終わったな？　このプレートは、ステータスプレートと呼ばれてい

る。文字通り、自分の客観的なステータスを数値化して示してくれるものだ。最も信頼のある身分証明書でもある。これがあれば迷子になっても平気だからな、失くすなよ？」

非常に気楽な喋り方をするメルド。彼は豪放磊落な性格で、「これから戦友になろうってのにいつまでも他人行儀に話せるか！」と、他の騎士団員達にも普通に接するように忠告するくらいだ。

鈴奈達もその方が気楽で良かった。遥か年上の人達から慇懃な態度を取られると居心地が悪くてしょうがないのだ。

「プレートの一面に魔法陣が刻まれているだろう。そこに、一緒に渡した針で指に傷を作って魔法陣に血を一滴垂らしてくれ。それで所持者が登録される。〝ステータスオープン〟と言えば表に自分のステータスが表示されるはずだ。ああ、原理とか聞くなよ？　そんなもん知らないからな。神代のアーティファクトの類だ」

「アーティファクト？」

アーティファクトという聞き慣れない単語に光輝が質問をする。

「アーティファクトって言うのはな、現代じゃ再現できない強力な力を持った魔法の道具のことだ。まだ神やその眷属けんぞく達が地上にいた神代に創られたと言われてい

る。そのステータスプレートもその一つでな、複製するアーティファクトと一緒に、昔からこの世界に普及しているものとしては唯一のアーティファクトだ。普通は、アーティファクトと言えば国宝になるもんなんだが、これは一般市民にも流通している。身分証に便利だからな」

なるほど、と頷き生徒達は、顔を顰めながら指先に針をチョンと刺し、プクと浮き上がった血を魔法陣に擦りつけた。すると、魔法陣が一瞬淡く輝いた。鈴奈も同じように血を擦りつけ表を見る。

（大和達は別にいいらしい）

すると、

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

星　鈴奈　２０歳　女　レベル：１

天職：提督・指揮官・■■■■■

筋力：５０

体力：１５０

耐性：１５０

敏捷：３０

魔力：１０

魔耐：１０
技能：領域展開・妖精さん・艦娘指揮・??????化・士気管理・■■■■・言語理解
＝＝
と表示された。
えっと、うん。突っ込んでいいかな。まず領域展開とはなんぞや。
あと妖精さんってあの子達か。
うん。見事に艦娘…みんなのことフォローしますって感じだねえ。
うん。伏せ字のところはうん。なんとなくわかるけど放置で。
うん。で、ハジメくんのはっと。
…なんか落ち込んでるけど。
「ハジメくん。見せて」
「……良いよ」
「ありがと」
さて。どれどれってこ、これは！
＝＝
南雲ハジメ　１７歳　男　レベル：１
天職：錬成師

筋力：１０
体力：１０
耐性：１０
敏捷：１０
魔力：１０
魔耐：１０
技能：錬成・言語理解

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

私たちにピッタリ！うん。明石落ち着け。大丈夫。

「全員見れたか？　説明するぞ？　まず、最初に〝レベル〟があるだろう？　それは各ステータスの上昇と共に上がる。上限は１００でそれがその人間の限界を示す。つまりレベルは、その人間が到達できる領域の現在値を示していると思ってくれ。レベル１００ということは、人間としての潜在能力を全て発揮した極地ということだからな。そんな奴はそうそういない」

どうやらゲームのようにレベルが上がるからステータスが上がる訳ではないらしい。

「ステータスは日々の鍛錬で当然上昇するし、魔法や魔法具で上昇させることもできる。また、魔力の高い者は自然と他のステータスも高くなる。詳しいことはわかっていない

が、魔力が身体のスペックを無意識に補助しているのではないかと考えられている。それと、後でお前等用に装備を選んでもらうから楽しみにしておけ。なにせ救国の勇者御一行だからな。国の宝物庫大開放だぞ！」

メルド団長の言葉から推測すると、魔物を倒しただけでステータスが一気に上昇するということはないらしい。地道に腕を磨かなければならないようだ。

「次に〝天職〟ってのがあるだろう？　それは言うなれば〝才能〟だ。末尾にある〝技能〟と連動していて、その天職の領分においては無類の才能を発揮する。天職持ちは少ない。戦闘系天職と非戦系天職に分類されるんだが、戦闘系は千人に一人、ものによっちゃあ万人に一人の割合だ。非戦系も少ないと言えば少ないが……百人に一人はいるな。十人に一人という珍しくないものも結構ある。生産職は持っている奴が多いな」

ほへー。私のはどっちだろ。まあ良いや。ハジメくんをどうやって育成しようかな～。

「後は……各ステータスは見たままだ。大体レベル１の平均は１０くらいだな。まぁ、お前達ならその数倍から数十倍は高いだろうがな！　全く羨ましい限りだ！　あ、ステータスプレートの内容は報告してくれ。訓練内容の参考にしなきゃならんからな」

この世界のレベル１の平均は１０らしい。

……うん。まぁ平均ってことは伸び代があるってこと！とりあえず明石達に任せて…の前に、明石と秋津洲と夕張のことを紹介して…と考えている。なお、その間もしっかりと話は聞いている。
提督たるもの、同時に複数の無線が入電することがある。そのために身につけなければならない技能である。
メルド団長の呼び掛けに、早速、光輝がステータスの報告をしに前へ出た。そのステータスは……

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

天之河光輝　１７歳　男　レベル：1
天職：勇者
筋力：１００
体力：１００
耐性：１００
敏捷：１００
魔力：１００
魔耐：１００
技能：全属性適性・全属性耐性・物理耐性・複合魔法・剣術・剛力・縮地・先読・高

速魔力回復・気配感知・魔力感知・限界突破・言語理解
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

まさにチートの権化だった。

「ほお～、流石勇者様だな。レベル1で既に三桁か……技能も普通は二つ三つなんだがな……規格外な奴め！　頼もしい限りだ！」

「いや～、あはは……」

この勇者さん以外もチートの権化であった。

さて、自分たちの番になったわけだが。

まだ私は考え続けていた。

…ま、後にしよ。

「えっと、私のステータスですか？これです」

私は提出した。

「……領域展開ってなんだ？」

「さあ？」

「……触れないでおこう。でだ。完全に非戦だな。謎の四角を除いて、だが」

「そうでしょうか？それなりに戦えますが」

「…………ノーコメントで」

「アッハイ」
「でだ。ハジメだな」
「あ、ハジメのことは私に任せてください」
「何故だ？」
「見てくだされば わかるかと……明石、夕張、秋津洲。おいで」
　三人が出てきた…真っ黒けで。
「何があったの？」
「後でです。で、なんで私たちを呼んだんですか？」
「見れば分かる」
　ハジメが恐る恐るステータスを見せる。
「ああ、その、なんだ。錬成師というのは、まぁ、言ってみれば鍛冶職のことだ。鍛冶するときに便利だとか……」
　歯切れ悪くハジメの天職を説明するメルド団長。
　その様子にハジメを目の敵かたきにしている男子達が食いつかないはずがない。鍛冶職ということは明らかに非戦系天職だ。クラスメイト達全員が戦闘系天職を持ち、これから戦いが待っている状況では役立たずの可能性が大きい。
　檜山大介が、ニヤニヤとしながら声を張り上げる。

「おいおい、南雲。もしかしてお前、非戦系か？　鍛治職でどうやって戦うんだよ？　メルドさん、その錬成師って珍しいんっすか？」
「……いや、鍛治職の十人に一人は持っている。国お抱えの職人は全員持っているな」
「おいおい、南雲～。お前、そんなんで戦えるわけ？」
檜山が、実にウザイ感じでハジメと肩を組む。見渡せば、周りの生徒達――特に男子はニヤニヤと嗤わらっている。
「さぁ、やってみないと分からないかな」
「じゃあさ、ちょっとステータス見せてみろよ。天職がショボイ分ステータスは高いんだよなぁ～？」
メルド団長の表情から内容を察しているだろうに、わざわざ執拗しつように聞く檜山。本当に嫌な性格をしている。取り巻きの三人もはやし立てる。強い者には媚び、弱い者には強く出る典型的な小物の行動だ。事実、香織や雫などは不快げに眉をひそめている。
香織に惚れているくせに、なぜそれに気がつかないのか。そんなことを考えながら、ハジメは投げやり気味にプレートを渡す。
ハジメのプレートの内容を見て、檜山は爆笑した。そして、斎藤達取り巻きに投げ渡し内容を見た他の連中も爆笑なり失笑なりをしていく。

「ぶっはははっ〜、なんだこれ！　完全に一般人じゃねぇか！」

「ぎゃははは〜、むしろ平均が１０なんだから、場合によっちゃその辺の子供より弱いかもな〜」

「ヒァハハハ〜、無理無理！　直ぐ死ぬってコイツ！　肉壁にもならねぇよ！」

　次々と笑い出す生徒に香織が憤然と動き出す。しかし、その前にウガーと怒りの声を発する人がいた。愛子先生だ。

「こらー！　何を笑っているんですか！　仲間を笑うなんて先生許しませんよ！　ええ、先生は絶対許しません！　早くプレートを南雲君に返しなさい！」

　ちっこい体で精一杯怒りを表現する愛子先生。その姿に毒気を抜かれたのかプレートがハジメに返される。

　愛子先生はハジメに向き直ると励ますように肩を叩いた。

「南雲君、気にすることはありませんよ！　先生だって非戦系？　とかいう天職ですし、ステータスだってほとんど平均です。南雲君は一人じゃありませんからね！」

　そう言って「ほらっ」と愛子先生は自分のステータスを見せた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

畑山愛子　２５歳　女　レベル：1

天職：作農師

筋力：５
体力：１０
耐性：１０
敏捷：５
魔力：１００
魔耐：１０
技能：土壌管理・土壌回復・範囲耕作・成長促進・品種改良・植物系鑑定・肥料生成・混在育成・自動収穫・発酵操作・範囲温度調整・農場結界・豊穣天雨・言語理解
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ハジメは死んだ魚のような目をして遠くを見だした。

「あれっ、どうしたんですか！　南雲君！」とハジメをガクガク揺さぶる愛子先生。

確かに全体のステータスは低いし、非戦系天職だろうことは一目でわかるのだが……魔力だけなら勇者に匹敵しており、技能数なら超えている。糧食問題は戦争には付きものだ。ハジメのようにいくらでも優秀な代わりのいる職業ではないのだ。つまり、愛子先生も十二分にチートだった。

ちょっと、一人じゃないかもと期待したハジメのダメージは深い。

しかし、そんなハジメに救いの手を出した人がいた。

そう。私達佐世保鎮守府チームである。
「ねえ。さっきの男子四人衆。ここに正座しなさい」
「「「あ？」」」
「早くしなさい」
四人はいやそうに座る。あぐらで。
「……あきつ」
「了解であります」
いや、え？いつの間にあきつ丸さん来てたの？
「上官の命令に逆らうなど、いけないであります」
「あきつ、いつものアレじゃダメだよ」
「分かっているであります。提督さん達の書類が終わらなくて、５徹くらいで落ちそうになるときにする注入棒ではないであります」
みんなが私を見る。
「あ、勘違いしないでよ？他の奴の書類とか大本営で処理する書類がこっちに流されているだけだから」
「いや、それやばくないか？」
「ま、提督さんは大本営に嫌われてますからね」

「あーもー、戻るよ。さっきあんたら、鍛治を笑ったな?鍛治はな。大切なものだ、特に戦時中はな。聞いたことないか?あのとき、米軍が狙ったのは大都市や、軍需工場とかだって。察しの良い奴は気づいたな?そうだ。鍛治…つまり武器を作るということだ。いくら才能があっても、強い船でも、武器が無ければ、壊れていれば、弾が無かればー意味がない。それを笑ったのか?じゃああんたら素手で敵を倒せるのか?……鍛治を、生産を笑うってのは、そう言うもんだ。しかも、ハジメの技能【錬成】。ハジメ。これってボーキとか石油とか…作れたりしないか?」

明石達がはっとした。

「つまり。あんたらは資源を自由に作って、それを加工して武器に出来る凄い才能の持ち主を笑ったんだ。

分かったか?」

「アッハイ」

のちにハジメは、自分のために怒ってくれているのにとても怖かったと語っている。

鈴と鈴奈

私―鈴奈から見てハジメは、救世主だ。何故ならば、資源を確保出来るからだ。
まあ、それ以外にもあるが。
なおここは領域の中である。
鈴奈が領域展開したら、何故か鎮守府だったからである。海は綺麗で広い。
「司令官さん、私あの人が気になるのです。ちょっといってくるのです」
「え、ちょっと電待ってって行っちゃった」
そう言って電が向かったのは、中村恵里のところだった。
…鈴奈は現実逃避しようと向こうを向いたが……武蔵と龍之介が組み手をしているのを見て、顔を伏せた。
「大淀～早く帰ってきて～」
大淀は、香織に連れ去られた。
何故かみんながフリーダムになっているのを理解して、思考停止した。
……多分深海棲艦がいないから自由に出来るんだろう。
……疲れた。

「あ、あの！鈴奈さん、ですよね！」
「うん。そうだけど？どうしたの？」
「私を鍛えてください！」
そう言って頭を下げているのは、谷口鈴だった。
…いや、なんで？
「ちょっといい？なんでなの？」
「みんなが提督がいいって……」
「……分かった、とりあえず教えて。あなたの天職は？」
「結界師、です」
「なるほど。なんでかわかった」
私は言いながら……横の本棚にある本…結界師を見つめていた。
「とりあえず場所移そうか」
「は、はい！」
「うーん、ちょっとみんな解除するから一回ストップ」
解除すると、元の訓練場だった。
「ほんと提督のそれって不思議よね」
「まあね」

「って気安く撫でるんじゃないわよこんのクソ提督！」
「ちょっと瑞鶴」
　……ま、いいか。
「さ、鈴ちゃん。こっちだよ」
「ここは…」
「ここならいいかな。限定展開【執務室】」
「え」
「これで良し、と」
「あ、あの、ありがとうございます！」
「いいのいいの。さて、なんで強くなりたいの？」
「それは……香織ちゃんとハジメくんを守りたいから、です」
「へえ……香織ちゃんってあのハジメくんにゾッコンな？」
「はい」
「あの、檜山くん、と言う人がいます。その人は、香織ちゃんに執着してて、それで、ハジメくんが……」
「なるほど。分かった。鍛えてあげる」
「ありがとうございます。どうやって」

「うーん、武術、かな。それならある程度は教えられる」
「え？でもそれって私とは違う」
「私が思うに、天職っていうのはその人はそれにしかなれないというわけじゃなくて、あくまでも沢山の中の一つだと思うんだ。私だって、初めから提督になりたかったわけじゃない。私は先生になりたかった。けど、妖精が見えるから。そんな理由で。…妖精が見えるようになったのは突然だったのにね。いつのまにか大本営で訓練受けてたよ。15のときかな。確かその5年前に私がその時住んでいた村に急に深海棲艦が侵攻してきてね。私は、両親と妹を失った」
「え。話してよかったんですか、そんなこと」
「いいのいいの。で、私は妹を連れて陸に逃げた。その時見たのが、艦娘。艦娘の、夕立。いつもぽいぽい言ってる子。その間にえっと、那珂と川内が助けてくれた。生き残りはいませんかーって。それを聞いて、いつの間にか冷たくなっていた妹を抱えて、走った。一生懸命に。後で聞いた話だけど、その侵攻での生き残りは私だけだったらしい。その後、自分の街があったところに戻ったら、もう言葉が出なかったよ。焼け野原で、かろうじて立っている家が1、2件。そんな感じだった。私の家？もちろん無くなってた。それで、私は今もこれを持ってる。助けてくれた夕立？元気にしてるよ。大本営で」
　そう言って見せてくれたのは、ロケット。開けると、写真があった。幼い鈴奈と、妹。

それを囲むように両親。
鈴は言葉が出なかった。
鈴奈の過去は、鈴が考えていたよりも壮絶なものだったからだ。
たった一言、言えたのは。
「それで、どうして、先生に?」
だった。
私は少し悩むと、こう言った。
「助けてくれた艦娘のこと。その前の姿のことや歴史。それを伝えるため、かな」
と。
だから歴史には強いし、ミリタリーのことも詳しいよ。
笑って、言った。

鈴と鈴奈2

「それで…先生になりたかったんですね…」
「うん。もともと私は友達に鈴ちゃん教えるの上手いから先生に向いてるよって言われてて、でも別の友達にもリンリン…あ、これあだ名ね？鈴って書くから、リンリン。レイちゃんはいたから。でも、リンリンがゲームで指揮してくれる時、その指揮がピッタリで絶対指揮官向いてるよって言われて。あ、後リンリンってなんであんなにゲーム上手なの？っとも言われたね。だって私治癒系だろうが後衛だろうが前に出て敵を倒すから…あ、ゲームでね。うん。一部の業界でバーサーカーって言われたな。あー、ゲームしたい…あ、ごめんね、私のことばっかり」
「いえ、ありがとうございます。鈴奈さん、なんであのとき声を上げたんですか？」
　あのとき……ああ、戦争がどうのこうのっていうときか。
「そうだね。この中で一番戦争について知っていたから、かな。それと、もう戦争で悲しい思いをする子供はわたしで十分だから。ま、上手く交渉できなかったんだけどね…ん？」
　無線機がなった。

「なんで？……応答求めます。……え？電？…ごめん鈴ちゃん。また後で、になりそう。…電が、危ない」
「なんでですか？」
「私の無線が電からだったから。それに周波数も」
「分かりました。では、また」
「うん。…領域解除」
　元の森に戻った。
「…こちら鈴奈。応答求めます」
「こちら、電。司令官さん。訓練場の奥に、来てくださいなのです」
「電？電！……」
　わたしは、無線機を取り出して、走って向かいながら別の人に無線をかけた。
「こちら提督……響。今どこにいるの？」
「訓練場。暁たちも一緒だよ。あ、でも、電がいない」
「さっき無線があって、訓練場の奥に来てだって」
「わかった。すぐに向かう。スパシーバ」
「…川内。お願い」
「了解」

…さて、何があったかな。

《電サイド》

恵里ちゃんとはうまく話せなかったのです……うん？あそこにいるのってハジメくんなのです?!ハジメくんが危ないのです！…司令官さんに報告して…よし、なのです。

「ちょっと、やめるのです…っきゃっ」

…うう。痛いのです……だけど電は、みんなを助けたいのです。だから、耐えるのです。

……よく思ったら深海棲艦の砲撃よりも痛くないのです。

《鈴奈サイド》

「「「電！」」」

「司令官さん？早！」

「……電！大丈夫かい！」

「うう。響ちゃん？ちょっと痛いけど、ル級の砲撃が直撃した時よりは痛くないのです」

「「え」」

「それはごめんって。川内。あきつを」

「もう連れてきた」
「ありがとう」
「どうも」
「…電？」
「電は、大丈夫なのです。だから、耐えるのです。か？わーすげーてか？イラつくんだよ！」
　……誰だこいつ。
「お前が上司だったな。うらやましいんだよ！どうせあんなことやこんなことをさせてんだろ？」
「だから…電、だったか。こいつのかわりに……」
「電のかわりに私がなんだって？」
「「!?」」
　私は笑みを浮かべていった。
　そして艦娘は思った。
（あ、これブチギレモードだ）
　と。
　電は、鈴奈の初期艦である。

なので、電をこいつと呼ばれたことにブチギレてるのである。
私は笑みを浮かべて、虚空から木刀を取り出した。
「…いいよ。ただし。謝れ」
「あ？電と、暁たち。みんなに、謝れ！」
「は？なんでだよ。なんで俺がそんなことしなければならないだよ！
ここに風撃を望むーー〝風球〟」
私はそれを……斬った。
「な、なんでだよ！なんで斬れるんだよ！バケモノかよ！」
私は何も言わずに、ただ見つめていた。
「ク、クソが！ここに焼撃を望むーー〝火球〟」
火、かぁ。なら斬れないな。なら……わざと当たるか。
「熱っ」
「「「提督！（司令官さん！）」」」
左腕、か。なら…まだ戦える。
私は距離を詰めると、懐に入り……回し蹴りを食らわせた。
「ぐはっ」
「お前…おい！暴力だろ！」

「？正当防衛だよ？だって……怪我したから」
『！』
「みんな！大丈夫？」
「あ、香織さん！」
「電、大丈夫？見せてごらん」
「大丈夫なのです、ちょっと痣が痛いだけなのです。提督も火傷、大丈夫なのです？」
「痛いっちゃ痛いけど……あのときよりは痛くないから。電は優しいね」
「ありがとうなのです！」
「…火傷？痣？ちょっと見せてくれないかな？」
「いや、正当防衛の根拠にな「いいから早く見せろ」ひえ」
（提督が怖がる香織さん……すごい…）
「あなたも！」
「ほへ？電たち艦娘は、これくらいはドックに入れば治りますよ？」
「……でもみせて！」
「わかりました、なのです」

鈴奈と光輝

「鈴奈。あなたは一体なんなんだ？」

？顔を上げると、光輝…あーもうキラキラが立っていた。

「……なんのこと？」

「その茶髪の子のことだよ。さっき言ってたが……なんなんだ、艦娘って。そんなもの、いるわけがない！大体、そんな子供が戦えるわけがないだろう！」

……はあ。

「それに、あなたは訓練にも出ずに何をしているんだ？そこにいる、ハジメもな。それに、ずっと思っていたが、言い過ぎじゃないのか？檜山が震えてたぞ！」

……檜山って誰だ？

「……さっき、そんな子供って言ったわよね、それって誰のことを言ってるの？「てーとく、イムヤやローちゃんたちがイムヤたちはどうすればいいって言ってたでち。だからゴーヤが聞きにきたでち」……ゴーヤ。とりあえず、戻ってくれない？話がややこしくなったから。」

「わかったでち」

「……さっきの子はなんだ！」
「潜水艦伊５８」
「……？なんだそれ」
「「「「……嘘でしょ（だろ）（なのです？）（っぽい）」」」」」
「え……あなたまさか潜水艦も知らないの？嘘よね？」
「潜水艦ってなんだ？」
「社会で習わないの？一般常識でしょ」
「……船って水に浮くもんだろ？」
「……」
　無表情になる。
「なんであの子はスク水なんだ！そういう趣味なのか？」
「あの子…いえ、ゴーヤたちはスク水が制服なのよ」
（絶対わかんないだろうけど。私も初めは違和感だったもの。まあそれを言ったらおしまいだけどね）
「……は？何を言っているんだ？スク水が制服なわけないだろう！今すぐ着替えさせろ！」
「…いや、でもどうせ艤装出す時に服戻るし」

「艤装ってなんだ？」
「「「「「あ」」」」」
「……ああ。そういうこと。道理で話が合わないと思った」
「今すぐ話せ！艤装ってなんだ！」
「……言って良いのかな。一応一般人だし。……じゃあみんなを集めてくれないかしら？」
「ちょっと司令官さん！」
「話しておかなければならないかなって思ったから。もう鈴ちゃんには話したし。ただし、1つ条件がある」
「なんだと」
「……それは、ここで話したことは、元の世界に戻ったら、誰にも言わないこと。そして、ここにいる人……メルドさんたちやあなたたちだけの秘密にすること。それが条件よ」
「……いいだろう。ちょっと待っていてくれ」
「訓練場を使うわ。確か書くものがあったはずだから」
「おい、ちゃんと集めたぞ。これでいいんだろうな？」
「……ええ。いいわ。……いい？これから私が話すことは、他言無用よ。いいわね？」
「……」

「うーん、じゃあどこから話せばいいかな。やっぱり、艦娘と深海棲艦について？それとも私の過去から？もしくは、初めから？」
「……司令官さん。艦娘と深海棲艦がいいと思うっぽい。司令官さんの過去は……この人たちにとっては、重すぎると思うっぽい」
「うーん、でもなあ。まあ、うん。艦娘と深海棲艦についてにしようか」
「艦娘？ってなんだ？」
「艦娘っていうのはね。先の大戦で沈んだ……まあ一部沈んでないのもあるけど……活躍した？か？……まあいいや、とにかく沈んでしまった艦艇が深海棲艦へのカウンターとして生まれた、艦艇の魂を持つ女性のこと。女の子も含まれるけど」
「で、それがあの……響？とかいうのか？」
「ええ。そうよ。深海棲艦というのは、いまいちよくわかっていないわ。ただわかるのは数十年年前に生まれ、私たちへと襲いかかってくること。それと、深海棲艦が海を支配しているということ。彼女たちには現代兵器は通じなかったらしいよ。そのせいで、ヒトは魚も満足に取れなかったらしいわ。艦娘が生まれるまでは」
「……へえ。で、そこの女の子が艦娘ってこと？そんな力持ってるようには見えないけど」
「そんなの当たり前よ。だって日常生活を送るのに困るじゃない。艦娘がその力を発揮

するのは、艤装展開したら、の話よ。……電」
「はいなのです」
電に、艤装が展開された。……つまりはそういうことだ。
反応は、２つにわかれる。
１つは、怖がるもの。
もう１つは、カッコいいとなるもの。
……ハジメと清水は、後者だった。
そして、光輝は、前者だった。
私は失望していた。戦争に参加するといったもだから、てっきり体制があるのだと思っていたからだ。
そしてハジメくんと男の子。電を質問責めするのはやめなさい。電困ってるでしょうが。
「はいはい。落ち着いて。よっぽどのことが無い限り、あなたたちに砲は向けないから。光輝くん。わかった？」
「あ、ああ。ではあなたの過去を教えて欲しいかな？」
「いいの？自分でも思うけどかなり重たいから。本当に、聞くの？」
「ああ。覚悟は出来てる」

「」

いきなりイケメンムーヴすんなよ、びっくりしたじゃねぇか。

「……まずね。私は両親と妹がいたわ。だけど。１０年前のある日。１０歳の時に、いっぺんに亡くしたわ。住んでいた村ごとね」

「……え」

「深海棲艦に襲われてね。私は目の前で、深海棲艦の砲弾でぐちゃぐちゃになった両親を、見た。妹は、私が咄嗟に目を塞いだから平気だったわ。けど、私は見た。いいえ、見てしまったのよ。当たるところも、しっかりと、ね。その後。妹を連れて逃げる途中に。燃えた街を見た。人の燃える匂いがした。友達の家の前を通った時。友達の家があったはずの場所は、何もなかった。そう。何も。この世の地獄を見た。…そして、私の目の前で、爆弾で足を吹き飛ばされた、妹を、見た。私は妹を抱えて走った。ずっと、ずっと。私も怪我してたけど、関係無かった。私の、最後の家族だったから。でも、ダメだった。たどり着いた病院は、燃えていた。倒壊していた。私はへたり込んだ。だって、私の村には、病院は１つしかないから。そしてその時気がついた。妹はすでに冷たくなっていたことを。もう、生きる意味はない。そう、思ったわ。上を見ると、艦載機が私に向かってくるのが見えた。ああ、死ぬんだなって思ったよ。だけど、生きてた。艦娘……駆逐艦

、『夕立』と、軽巡洋艦『那珂』『川内』に助けられたから。　それで、あの出来事から5年後。15歳の時に、提督になった。妖精さんが見える。そんな理由で」
「……え……」
「どう？これが私、星　鈴奈の過去よ」
「……」
「想像以上に重いな。って、15歳？中3じゃないか」
「中卒よ。もともとお金ないし。中卒で働こって思ってたくらいだから」
「……何で？」
「そんなの言われなくてもわかるでしょ？バイトよ。……私には夢があったけどね。お金がないから奨学金使っても入学金その他諸々払えるわけない。それに私借金嫌いだから」
「その、夢って？」
「先生」
「……本当にごめんなさい」
「いいのよ、別に。例え超絶ブラックでもね」
「え」
「ある意味でブラック鎮守府よ。なんで私が別の提督の尻ぬぐいせにゃならんのやら。

ま、知ってるよ？大本営から嫌われてるって。いや、前の司令長官は良い人だったよ？私を拾ってくれて、色々支援してくださったから」
「あっ（察し）」
「今のはもうダメ。私が最年少で、鎮守府任されてるからってわざと冷遇して。……はあ。なんかごめん」
「……（怖。ほんと怖）」
「でも本当に邪魔なら私をどっかの泊地にでも左遷すればいいのにね。あーあ。どうなってるかな。上の方。さっさと辞めればいいのに、あんの変態ハゲ野郎。鬱陶しいんだよ」
「あ……」
「あ。ご、ごめんね。ついいつもの癖で」
「鈴奈ちゃん」
「なんですか、メルドさん」
「良かったら愚痴きくよ」
「ありがとうございます！」
　神は実在した？
　だって飲まなきゃやってらんないもん。

何をかって？
三つの矢のサイダーだよ。
酒じゃないぞ。

鈴奈とオルクス大迷宮前夜

……あ。言っちゃった……ま、いいか。

「司令官さん……お疲れ様なのです」

「そういえば寝てもらってるのに隈が取れないなって思ってたけど……」

「そういうことだったのですね」

「大淀！いや、大淀７徹明けでしょ！寝ろ！」

「提督さんこそ５徹でしょう……わたすはまだ大丈夫れふ……ああ、横になったら眠く……ｚｚｚ」

「…よし！」

（……５徹ってやばくね？）

「それよりもさっきブラック鎮守府って聞こえたけど？」

「私が説明するのです！ブラック鎮守府略してブラ鎮「ストーップ、それはまずいまずい」……ブラックは、いわゆる捨て艦戦法などを戦術として使う、あとは、その……艦娘相手にあれをするなのど泊地などのことを言うのです」

「で、私の場合、色々あって、そのブラックの艦娘以上のヤバさだったの」

「……捨て艦戦法って？」
「……電たちが大破しても進撃して、轟沈しても、敵を沈める戦術のこと……なのです」
「私は大破中破撤退の方針よ。捨て艦戦法は、艦娘兵器派が使用するイメージがあるわね。実際私の鎮守府でも何人かそれで心がやばくなりかけたこがいるわ。……アレっていうのは、いっぱいの女子が、私の指示に従う、提督のほとんどはおとこ、あとはわかる？」
「……あー。いや、こんな可愛い子達で？ロ○コンかよ」
「……まあいいや、ごめんね、空気重くして。この話は終わり！」
（むしろ気になる）
もう終わり！終わりったら終わり！気が滅入るだけ！
……ふう、もう疲れた。いい加減寝たいなぁ、ゆっくり。
……色々あって短い間しか寝られなくなってしまったし、最近はあの夢ばかり見るからな……まったく、このチカラのせいで……迷惑だよ。
…予知夢。
そう、私は小さい頃から夢で未来を見るようになった、いえ、なってしまった。正確には１０年前のあの時からだけど。……なんだか嫌な予感がするんだよね、ここに来てから。

……メルドさんが何か言いたそうだな。
「メルドさん、言いたいことがあるのならどうぞ」
「ありがとう。明日から、実戦訓練の一環として【オルクス大迷宮】へ遠征に行く。必要なものはこちらで用意してあるが、今までの王都外での魔物との実戦訓練とは一線を画すと思ってくれ！　まぁ、要するに気合入れろってことだ！　今日はゆっくり休めよ！なお、今回は、しすまないが全員参加が原則となっている。鈴奈さん、理解してくれ」
「分かりました。おそらく皆さんの実力を図るようなものでしょう。あまり気負い過ぎないように。そして、誰一人失わずに、無事に帰り、暁の水平線に、勝利を刻みましょう」
「はい！」
艦娘たちが一斉に返事をする。
士気は十分のようだ（キラキラ状態）。
「えー、そういうことだ。では、解散！」
うーん、やっぱり嫌な予感がするんだよな。
……電に相談するか。
こういう時に限って当たるからな。

鈴奈とオルクス大迷宮

ほへー。ここがオルクス大迷宮か。

……なんかお祭り感すごいな。屋台まであるし。

って赤城？

「ねえ加賀さん、赤城さんがどこに行ったか知らない？」

「赤城ならそこでイカ焼き見てますよ」

……赤城、いつもの倍くらい食べてたのに。

「赤城さん。戻ってきてください！朝ご飯いつもの倍くらい食べていたのに、もうお腹減ったんですか？」

「だって、こっちでゼロとかが効くかなって考えたらお腹が空いて」

「……ほら、イカ焼きくらいなら買ってあげるから」

「やった」

……もう、赤城さんったら。

「あ、提督？私たちは帰りますね、もともと赤城がご飯のにおいがします！と言って勝手に来たんです。だから赤城を引っ張って帰ります」

「え、ちょ、加賀？あ、やめ、ご飯が、ご飯が～」
……はあ。
「司令官さん、その、電もちょっと緊張しているのです」
「……たしかにね。狭いところで戦闘ってそんなにないものね。跳弾とかが心配だよね」
「はい、なのです。でも、電たちは練度が高いので大丈夫だと思うのです。だけど……」
「ハジメくん、だよね。いや、明石たちと一緒に波動砲作った時はどうしようかなと思ったよ」
「なのです。波動砲って宇宙戦艦ヤマトの装備なのです。凄いのです」
「波動砲は倉庫に閉まっているよ。アレを使う日が来ないといいけど。燃費悪いし」
メルドさんが迷宮に入ったので、私たちも入った。
編成は、
第一艦隊【旗艦】《正規空母　瑞鶴》《駆逐艦　響》《雪風》《時雨》《軽巡洋艦　神通》《重巡洋艦　摩耶》
の幸運艦・高練度部隊。
何があるかわからないからだ。
第二艦隊【旗艦】《駆逐艦　電》《暁》《島風》《雷》《戦艦　榛名》《駆逐艦　夕立》

である。高速艦で固めている。そしてみんな高練度である。
駆逐艦と軽巡洋艦が多いのは、洞窟の中は狭いので、機動力が必要だと考えたからだ。
ところで島風改二と時雨改三まだですか？
もちろん最後尾である。
申し訳ないが那珂ちゃんはお留守番である。
なお、この提督の初期艦は電である。よって電の練度が一番高いのである。
なに？ゲームでは９９止まりだって？現実ではそんなことあるわけないだろうということで、電の練度は１９９である。
ケッコン？一応書類だけもらったぞ。
まだしていないぞ。
「えー、今回の作戦、オルクス大迷宮攻略作戦略してＯＤＫ作戦の目標は、みんな無事で帰る・練度向上・この世界でどれくらい通じるかの確認を込めている。私たちのモットー、響！
「大破進軍、ダメ・絶対。だよね、司令官」
「そうだ！そしてこれは今回も変わらない！というか中破もダメだ！意味は分かるよね？」
「……はい！」

だって服破れるもん。原理は不明だけど。
「では、作戦行動始め！」
「はい！」
「えっと、生徒の成長を妨げない程度でおねがいします」
「はい、わかってる。……瑞鶴、偵察機準備して！第一艦隊、陣形　輪形陣、第二艦隊、陣形　単縦陣！」
「了解！」
「ほへー。スゲー」
【おすすめＢＧＭ　砲雷撃戦、用意！】
「第一艦隊および第二艦隊、砲雷撃戦、用意！」
「はい！」
「よし、光輝達が前に出ろ。他は下がれ！　交代で前に出てもらうからな、準備しておけ！　あれはラットマンという魔物だ。すばしっこいが、たいした敵じゃない。冷静に行け！」
「提督、ネズミみたいなのがたくさんいます。今は光輝たちが相手にしているようです」
「了解、そのまま続けて」
「よし、次は鈴奈たちだな……なんかすごい」

「あ、私たちの番ですか？一応離れておいて下さい。流れ弾が当たったら痛いと思いますので」
「電の本気を見るのです！」
電が一体のラットマンに向けて、主砲を向け、放つ。
「摩耶様の攻撃、喰らえ～」
「榛名、参ります！勝利を、提督に！」
その辺りでラットマンは消えた……そう、消えたのである。
十中八九榛名である。
「……」
「その、すみません、提督。主砲ではなく副砲で打ちます」
「あ、はい」
「……すごい威力だな……」
メルドは冷や汗をかいた。こんなすごいものを撃てる少女をたくさん従えているのだから。
「あー、少し抑えるように」
それから順調に下って行き、二十階層に到着した。
少し探索しつつ歩いていると、メルドさんが言った。

「擬態しているぞ！　周りをよ～く注意しておけ！」
と。
私は、前の壁だろうな。と思った。
そして、この敵は任せようと考えた。
その後、色々あり（見えなかった）急に足元に魔法陣が浮き出た。
私は、視界が真っ白になりながら、こう思った。
あ、悪い予感てこういうのか。おそらく誰かが勝手に行動して、未確認のトラップでも発動させたんだろうな。と。
光が収まってみると、知らない部屋だった。
おそらくよほど下の階層だろう。
「響、時雨、雪風。生徒たちを。瑞鶴。航空戦の準備を。何が来るか分からないから。榛名、いつでも主砲は撃てるように。
摩耶、夕立、神通。メルドさんたちのフォローを。暁、雷、電、私の手伝いを。島風、全体のフォロー。いい？」
『了解（なのです）（っぽい）』
「では、行動開始！」
そう言った直後。

メルドさんの「まさか、ベヒモス、なのか」という声が聞こえた。
「作戦変更、摩耶、夕立、神通、私たちと一緒にベヒモスを討伐するのを手伝って」
「了解」
島風が連装砲ちゃんを展開させ、いつでも対応できるようにする。
ハイリヒ王国最高戦力が全力の多重障壁を張る。
「「全ての敵意と悪意を拒絶する、神の子らに絶対の守りを、ここは聖域なりて、神敵を通さず――〝聖絶〟!!」」

「メルドさん、手伝います!」
「摩耶様の砲撃、喰らえ」
「当たってください」
「……提督、撃っても?」
「榛名、全力で放て!」
「はい!バーニング、ラーブ!」
「……それ、金剛のじゃ……まあいいや」
「しれえ」
「どうした雪風」

「なんか変なのがわらわらしてきてるよ。反撃します」
「了解した。瑞鶴に、爆撃機は使えるか聞いてくれ」
「瑞鶴さんによると、狭すぎる、らしいです」
「了解した。また無線を頼む」
「分かりました！」
　さて、アレをどうしようか。とりあえずは光輝たちを撤退させなければ。そうしないと艦載機も飛ばせないし、迂闊に砲撃も出来ない。
「提督、私が一発食らわせる。その隙に」
「でも」
「……ハジメくん！」
「早く撤退しろ！今は雪風ちゃんたちが抑えてくれているが、いかんせん量が多すぎる！お前がいないと、クラスメイトは動かないんだよ！」
「っ不味い、もう持たない！」
「メルドさん、すみませー」
「下がれぇー」
　ほぼ同時に障壁が壊れた。
　咄嗟にハジメが、錬成し、ベヒモスを固定させた。

……むう。砲撃してもハジメにあたる。

……仕方ない。

「暁たち、時雨たちの支援に変更。私はアレをヤル」

「つでも司令官、それは」

「危ない、でしょ？大丈夫」

「っ分かりました」

……ふう。

「ハジメ、維持しながら下がれる？」

「えっと、多分」

「じゃあ、下がっててて」

さてと、久しぶりに抜きますか。

コレを。軍刀&拳銃

と思ったけど、流石に危ないな。銃弾も少ないし。……それにグロいのを見せるわけにはいかないしねっ。

とりあえず、突進が来るから跳んで避けて、壁に着地、そのままベヒモスの背中を蹴って元の場所に着地。

わかってはいたけど、ダメージ少ないね、でもヘイトはこっちに向いたはず。

すると、後ろから声が聞こえた。

「後衛組、遠距離魔法準備！　もうすぐ体力とかが尽きるだろう。アイツらが離脱したら一斉攻撃で、あの化け物を足止めしろ！」

メルドさん、か。よし、じゃあ離脱しようか。

そしてメルド団長の「打て！」の号令でたくさんの魔法が放たれた。

私は走る。念のため、ハジメを前にしている、と。

急に火球の軌道が曲がり、ハジメの目の前の橋に着弾した。橋は崩れていく。

っ不味い！

急いでハジメを連れて離脱しようとするが、届かない！

「提督（しれえ）（司令官）！」

みんなの声が聞こえるが、間に合わない。からだが落ちていく。

と、不敵に笑っている、檜山の顔が目に入った。

そこで私の記憶が途切れた。

そしてそれを全て見ていた子が居た。

《???》

うーん、提督。まだかな。

そういう彼女には大きな尻尾と大きな艤装。

そしてタコ焼きと魚雷があった。

島風と檜山

ところで、その落ちる時の様子を見ていた子が居た。
島風の、連装砲ちゃんである。
連装砲ちゃんは、檜山が火球を放ち、そして着弾させる時までしっかりと見ていた。
しかも後々役立つようにとこっそり妖精さんが録画していたのである。
それを島風に伝えたところ、もちろん島風はオコである。
今すぐ檜山を絞めたいくらいにはオコである。
しかし島風は耐えた。
島風たちが大丈夫なのは司令官が生きているからである。
司令官がいないと、艦娘はだんだんと動けなくなってしまう。
そのレベルは普通の女子に戻るくらいなのだが、海に出ることはほぼ出来ないし、艤装もつけられない。
そして島風たちが動けているのは提督が生きているからである。
それが分かるからこそ、我慢した。
そして、混乱しているみんなに言った。

「とりあえず戻ろう」
と。
司令官が生きているなら、ハジメくんも生きている、そう思ったからである。
みんなも従った。
そして王城に戻ると時雨たちを集めた。
そう。さっきの連装砲ちゃんの妖精さんが録画していた映像を見るためである。
そしてみんな驚いた。
檜山が提督を落としたからである。
特に電は酷かった。
一番初めからいたのに、人の感情には強いはずなのに、気づけなかったからである。
島風は、映像をメルドさんに見せることにした。
そして夕立と時雨が檜山を連行してきた。
メルドさんは、
「まさかな。檜山。コレはどういうつもりだ？」
と言った。
なお、映像は青葉が持っていきました。
「え、俺がやったって何かの間違いですよ。まさかね」

と、証拠を知らない檜山が言った。
証拠を見せると、檜山は明らかに震えだした。
「メルドさん。本当は今ここでこのクソをコロ……じゃない。ボコボコにしたいのです」
電が言った。
電はいつもはこんなことを言わない。
敵も助けたいのです、という優しい子だ。
しかし、こんなことを言った。
つまりは滅茶苦茶怒っているのである。
これにはメルドさんもドン引きである。
「あー、君の気持ちも分かるが、一旦抑えてくれないか？」
「……分かりました、なのです」
「電ちゃん……ううん？無線？」
「大淀さん？どうしたんです？」
「え？提督さん？あ、はい。分かりました」
「ノイズが酷いと言われたわ。無線は使い物にならないって」
「え…で、でも、しれぇは生きているんですよね？こっそりしれえのポケットに雪風が

作ったお守りをしのばせていうてよかったです」
「雪風ちゃん……ありがとう、なのです」
「えっと、提督さん……星鈴奈(ほしすずな)と、ハジメが生存しているということでいいかな?」
メルドさんが大淀さんに聞く。
「えっと、はい」
「じゃあみんなに報告しないとね。檜山のことと、その録画のことを」
「なら、みんなが目覚めてからが良い…と思うのです。白崎さん?がまだ目覚めていないのです」
「ああ、そうだね。そうしよう」
「それまで鎮守府のそういうところに閉じ込めておくのです。絶対開けられないのです。ご飯は届けるのです」
「……なんでそんなところが?」
「今の司令官の前の司令官が、ブラック司令官だったからしいのです」
「……聞かなかったことにするよ」
こうして、檜山は、白崎が目覚めるまで、真っ暗な牢の中でご飯だけ与えられる生活を送ることになったのであった。
なぜか?艦娘の罰です。ボコせなかったから。

鈴奈と奈落

「……う、イタタ……ここ、どこ」
そう思って横を見ると……ハジメくんが居た。
ああ、そうだ。橋から落ちたんだ。
とりあえず生存報告をっと。無線機無線機……。
あ、あった。
「えー、こちら提督。応答求めます」
「こちら大淀。ザいてザザ生きておられザザーですか？ザーーーました」
「ごめん、聞こえない」
「そうザーですザーでは、ザーーーーーーす」
む、無線は使えないな。ノイズがひどい。
次は……
「おーいハジメ～起きろ～」
「うーん、あと五分～」
「何馬鹿言ってるんです？死にたいんです？」

「……は。ここはって、鈴奈さん？」
「ええ。そうよ。さっき大淀と無線したけど、ノイズばかりで使い物にならなかったわ」
　ええ。本当にね。まあ、進んだ方が良いんだろうけど。
「確か……落ちて……うん？落ちて？え？なんで鈴奈さんが？」
「まあ良いでしょ？とりあえず進みましょう」
「……あの、鈴奈さん。あそこにいるのって、うさぎ？」
「そうね。……狼もいるわね。見る限り、うさぎの方が狼よりも強いらしいね……ん？」
　うさぎが狼に勝つ様子を見ながら言う。すると。
「何、あれ。くま？っ、ハジメ！逃げましょ、アレは不味い！」
「え？」
「良いから早く！私たちに気づく前に！」
『グオー』
「！よくわからないけど……『錬成』！」
　ハジメは穴を作っている。
　……けど、このペースじゃ……
「グオ？ウオー！」
　ッツ、気づかれた！……マズ、私が反撃しましょう。

見た感じ、クマのリーチはだいぶ長い……ここはリーチの外だけど、一歩寄られたら……

私は支給された旧式の銃（元々持っているもの。大本営からの支給）を構えながら考えた。

多分クマの毛皮は相当厚い。

……ありがとう、龍田。

私は龍田から受け取っていた薙刀を見ながら思った。

薙刀も装備していた。

……良し。

「やー」

薙刀で少し傷をつける。

大概の動物の急所の位置は変わらない。

そう、胸の位置に。

とはいえ、致命傷までは至らない。

元々期待していない。

だから、その傷口に向け、発砲した。

タタタタタ

と音がする。
熊は、動かないようだ。しかし、油断は禁物だ。
一度、雪風が死んだふりをした深海棲艦で大破に陥ったことがあるからだ。
まだ一発残している。
静寂な洞窟。
熊が、動いた。
しかし、その動きにはキレがない。
私は冷静になって、頭に狙いを定めた。
三…二…一…今！
私は、熊の頭に向け、撃った。
今度こそ、動かなくなった。
クマは、絶命した。
やらなくちゃ、やられる。
ここ…オルクスはそういうところだ。
私はやはりそう思った。
クマの肉は気になるが、ハジメによると猛毒らしい。
なお、戦闘中に掘り終え、横穴が見つかったらしい。

そこは、私たちくらいしか入れないのでセーフゾーンとなっている。
食料にはあまり困っていない。
なぜなら、妖精さんが戦闘糧食（おにぎり）を持ってきてくれたからだ。
「ねえ。私たちには、二つの道があるわ。一つ。上に行き、戻る。二つ。下へ行き、ここを攻略する。どっちが良い？」
「……そうだな。二つ目、かな」
「どうして？」
「なんとなく、そうした方がいいような気がするから」
「……そう。ならあなたを尊重するわ」
「……ところであの肉食べないか？」
「え」
「いや。やっぱり気になるから」
「ええ……でも猛毒って」
「これ（神水）があるから大丈夫だろう」
「でも腐ってるんじゃない？」
「だいじょうぶです」
「くさらないようにしました」

「どくのせいぶんもかいせきしてあります」
「でもどくのせいぶんはからだをかいぞうしてこゆうまほうをしゅうとくさせるらしいです」
「……妖精さんスゴ」
「えっへん」
「どうするの？ハジメくん」
「僕だけ食べるよ」
「どうして？」
「鈴奈さんは向いてない気がして」
はあ。全くこの子供は。
「分かったわ」
「あ、ちなみにすごーくいたいらしいです」
「のらようせいがたべました」
「…え？」
「そのようせいは、ぴんぴんしています」
何勝手にして……もう。疲れた。

島風と光輝と映像

電ブラック寸前事件から数日後。
「島風さん、香織が起きたわ。それで、伝えたいことって一体……」
「……ありがとう。雫さん。では、訓練場に集めてくれないかしら」
「え？ええ。分かったわ」
「……大淀さん。無線の音声は」
「もちろん録音してあります」
そう。今日は檜山断罪の日である。
「……みんな集めたわ。それで、何が始まるの？」
雫が島風に聞く。
「そうだね……電ちゃんに聞いた方が早いんじゃないかな？」
「え？電ちゃんに？電ちゃんってあそこで怖くなってる電ちゃん？」
「うん」
「ええ……」
もう電はキレている。

「あー、集まってもらったのはだな。そこの島風の要望があったからだ。島風、前に出て説明してもらえるか？」
「はい！でも、その前に重要人物がまだ来ていませんよ？」
「……檜山のことか？」
「そうだよ、だって檜山を断罪するんだから」
『え？』
「檜山が悪いことをしたとでも？」
「そう。えっと、キラキラ。「キラキラ!?」檜山が司令官たちをヤろうとしたからね」
「島風ちゃん、連れてきたで」
「龍驤さん、黒潮ちゃん、ありがとう！」
「な、なんで檜山はそんなことに？」
　檜山は、手錠をかけられていた。
「あー、でもマシな方だよ？だって、電ちゃんなんか……手枷と口枷が良いと思うのですって言ってたから。ね、大井っち」
　と、北上がいう。
『……』
　クラスメイトはポカーンとしている。

「あー、なんでかというとだな。オルクス大迷宮で、ハジメと鈴奈が落ちた原因の火球。あれを放った犯人が分かったからだ」
「どこに証拠があるってんだよ！俺はやってない！」
　と、檜山が言う。
「……本当なのです？嘘だったらどうするのです？」
　と、沈黙していた電が言う。
「電たちはあなたがやった決定的な証拠を持っているのです」
「は？」
「島風ちゃん。見せてあげて、なのです」
　電ちゃん、怖い……気持ちはわかるけど。
「電、こっちに行こうか」
「……響ちゃん……でも、電は」
「その気持ちはわかる。だけど、このままだと闇に堕ちちゃう。私はそんな電を見るのは、嫌だ」
「わかったのです」
「電、スパシーバ」
　響ちゃん、ナイス

録画視聴終了……

「……檜山……」

ゆらり、と香織さんが立ち上がった。

「ねえ。これはなんでかな？」

「香織。なにかの間違いだ」

みんなが

『は？』

となった。

「こんなビデオは捏造だ。だいたい、都合が良すぎる。ただのミスだ！檜山に悪気はない！」

と、キラキラ野郎が言った。

「本当にそうかしら？」

「川内さん！」

「これを聞いてもそう言えるの、光輝」

そこには、月下の誓いの時の檜山の発言があった。

私たちも初耳だった。

夜に川内さんが出歩いてるのは知ってはいたけど……川内さん、すごい。

「……こんなの嘘に決まっている！檜山、こんなことは言っていないよな？」
「……言ったさ！俺はな！ハジメが気に入らないんだよ！」
「は？」
「ねえ。じゃあなんでハジメと司令官さんを落としたのです？」
「……香織があいつを好きになったからだよ！あんな奴、香織には相応しくなんかない！俺の方がふさわしい！それに、あんなの、迷惑だし足を引っ張るだけなんだよ！だったら死んだ方がいいじゃないか！あと、お前らの提督さんは偶然だ。あんな奴を助けようとするほうが悪いんだ！」
　……え……ヤバ。前の司令官よりもヤバ。まえの司令官はうん。やばかったけど、責任転嫁はしなかった。だからこいつの方がヤバい。
　しかも香織さんの前で言う？
「え……香織が、ハジメを好き？お節介じゃ、なかったのか？」
　キラキラはそこにも気づいてなかったのか？
「……あー、それで、檜山。生きているぞ。二人とも。良かったな」
「……大淀さん。お願い出来ます？」
「はい。これは、提督さんが落ちた後の無線の音声です。ノイズが酷いですが」
　聞いた後……

「……クソが。なんで死んでねえんだよ！」
うわ。もう無理じゃん。電が真っ黒いオーラに包まれているよ。香織さんも。
あー、うん。
「……檜山……嘘だろ。お前なんかと友達になるんじゃなかった」
「同感だ」
「あー、それで、だな。…うん？電、どうした？」
「……ふざけるな、なのです。司令官さんも、ハジメさんも、頑張ってたのです。それを、単なる憎しみで、そんなことするなんて、絶対に許さないのです。……地獄に落ちろ、なのです」
「……」
……電ちゃんがあそこまで怒ったの見たことない。電ちゃん、優しくて敵も助けたいのですという子なのに。
「あー、夕立も、本当は魚雷ぶち込ませたいっぽい。だけど電ちゃんがしなかったから夕立もしないっぽい？」
……あー、うん。みんなキレてるね。榛名さんなんて今にも撃ちそうだもの。
「で。こいつ……檜山。どうする」
「……部屋に軟禁」

「同意、なのです」
「……」
「同意っぽい」
「光輝。どう思う」
「……」
「あー、じゃあ檜山の罰は部屋に軟禁に決まりだ」
「見張りがいると思うっぽい。見張りは夕立がしたいっぽい」
「あ、どうぞ……」
……あ、うん。まあ妥当かな。
光輝？真っ白になってる。

夕立と時雨、電と響

「おい！ここから出せ！」
「うるさいっぽい。いい加減反省するっぽい。あんたが反省しないといつまでも電が真っ黒電ぽい。
　このままじゃ電が深海化しちゃうっぽい」
「そんなん知るか！早く出せ！」
「あんたはずーっとそればっかりっぽい。夕立も怒ってるっぽい。だけど、電がすごいから怒る気も失せたっぽい。静かにするっぽい」
　夕立は、檜山の部屋の前でいう。
「夕立は、時雨ちゃんと話したいっぽい。だけど夕立は見張ってるっぽい。それにこの仕打ちは当然っぽい。自業自得っぽい」
「……ぽいぽいうるさいな！」
「何か悪いっぽい？」
「……」
　ふう。やっと静かになったっぽい。それにとても疲れたっぽい。

「……夕立！」
「時雨っぽい？」
「うん。僕、心配で……」
「何がっぽい？」
「いや、何かされてないかとか」
「時雨、大丈夫っぽい。でも疲れて眠いっぽい」
「そうか……夕立、おやすみ。僕が変わるよ」
「……ありがとうっぽい……」

夕立、ちゃんと言ってくれれば協力したのに。
まあ、夕立が『ソロモンの悪夢』モードになってなくて良かった。
……この男はとんでもないことをやらかしてくれたね。
…よりにもよって「鎮守府の良心」電をブラックにさせるなんて。
…電が今一番深海化しそうなのに。
「おい！開けろって！聞こえないのか？」
「ああ……なんだい。うるさいな。夕立が寝ているんだ。静かにしてくれないかい？もしくは静かにすることもできないのかい、犯罪者くん」

「なっんだと！」
「ああ、殺人未遂は十分犯罪だよ？君はそんなことも知らないおバカさんなのかい？…まあいいや。僕は時雨。夕立の姉だよ」
「はあってどうでもいいんだよ！早く出せよ！」
「…いい加減静かにしてもらおうか。なんで君はこんなことになっているか、罰を受けているか。きちんと理解しているのかい？」
「そんなの、全部なくもが悪いに決まっているだろう！俺は悪くない！」
「…はあ。仕方がない。僕は君が白崎さんと接触する禁止令を出す」
「なんでだよ！」
「まだ分からないのかい？君は。君はずいぶんと都合のいい頭をしているようだ。自分は悪くない、悪いのは周りだ、というね。そんなことはないのに」
「……それのどこが悪いっていうんだよ！」
「……そして都合が悪くなると開き直る、か。前の司令官にそっくりだ」
「……っもういい！」
「ああ、そうしてもらえると助かるよ。何しろ夕立が寝ているんだからね」
……反省のそぶりは無し、か。
反省すれば出してもらえるかも知れないのに。

……まあ出すつもりはないけど。
電はどうしているかな……。

「電、大丈夫かい？大好物の間宮さんの羊羹を食べないなんて、電らしくないよ」
「……響ちゃん、ありがとうなのです。だけど今は食べる気が起きないのです」
「……でも、食べた方が良いと思うよ」
「だけど」
「電の気持ちは分かるよ。だからこそ、甘いものを食べよう。食べないと動けなくなるよ」
「あ……」
「ほら」
「うん。いただきます、なので……」
シュン
目の前から羊羹が消えた。
「……え？」
「消えた？」
「消えたのです？」

「響ちゃん！落ち込んでる場合じゃなかったのです！行動するのです！まずは間宮さんにって、雷ちゃん？その羊羹は……」
「え？電のだよ？」
　ゴゴゴゴゴゴ
「ご、ごめんなさい！だって食べないのならもらっちゃおうかなって」
「一人前のレディーは、人のを取らないのよ、雷。暁は一人前のレディーなんだから！」
（羊羹モグモグ）
「あー、暁？その羊羹は……」
「雷から貰ったわ」
「あれ？響ちゃんのが無いのです」
「いーかーづーちー？」
「ひええ～ごめんなさい～」
「あははは」
「もう一度もらって来ようか、電」
「響ちゃん、はい、なのです！」
「間宮さん、羊羹ください」
「あら響ちゃんと電ちゃん。どうしたの？」

「暁と雷が食べちゃって」
「あらあら、じゃあ、はい、どうぞ。さっき時雨ちゃんが夕立ちゃんのところに行ったから、四人で食べなさい」
「ありがとう、なのです。行きましょう、響ちゃん！」
「あ、うん間宮さん、ありがとう！」
　移動中……
「時雨ちゃん、夕立ちゃん、間宮さんが羊羹食べてって」
「わあ……ありがとうっぽい！四人分っぽい？」
「ありがとう、響ちゃん、電ちゃん。四人でたべてって？」
「はい、なのです。実は、響ちゃんと電にも羊羹あったのです。だけど雷ちゃんと暁ちゃんが食べちゃって……」
「なるほどっぽい！じゃあいただきますっぽい！」
『ご馳走さまでした（っぽい）（なのです）」
「やっぱり間宮さんの羊羹は美味しいっぽい！」
「そうなのです！電も、元気が出たのです！前を向くのです！」
「電、良かった。一番深海化しそうだったけど、そうならなくて本当に良かった」
「時雨、夕立、スパシーバ。電に元気を与えてくれて」

「どういたしましてっぽい！」
ふう。一件落着、かな。
間宮さんはすごいや。
みんなを笑顔にしてくれる。
さて、戻ろうか、電。

うん？君は誰だ？このエヒトに干渉するとは。
え？レ級？

夕立と電、あきつ丸と檜山

そんなことを私たち四人が話している時、あきつちゃんがやってきた。
「どうしたの、あきつちゃん。檜山関係？」
「こんにちはであります！夕立さん、時雨さん、電さん、響さん！今日からは正式に私も監視に入ることとなります！よろしくであります！」
「よろしくっぽい！」
「それにつきましては、今後はこのあきつ丸が中心となるであります！よろしいでしょうか？」
「夕立も疲れているみたいだし、いいんじゃないのかな？響ちゃんたちはどう思う？」
「夕立も賛成っぽい！あいつの文句をずっと聞いているのは疲れたっぽい！」
「電も、いいと思うのです。ただ、追加で……」
「ふむ。わかりました。採用します」
「でもそれって二人の負担が凄いんじゃないのかい？」
「じゃあ夕立が聞いてくるっぽい！」
「天龍さん、龍田さん、協力してくれないっぽい？」

「話を聞こうか」
「……ふんふん。分かった。龍田もいいか？」
「ええ。あいつには良い気がしないからな。いくら川内が天井裏で監視……盗聴……情報収集していて、夜戦バカだとしても、限界があるだろうし」
「それにストレス発散になりそうだからねえ。ありがとうね夕立ちゃん、早速連れていって」
「分かったっぽい！」
「……で。こいつが檜山か。へえ。悪人面してるな、殺人未遂という犯罪者」
「……何を言っているんだ？そもそも誰だ！凶器（薙刀）を持ち込むな！」
「いや、殺人未遂は十分犯罪だよ？刑法えっと何条だっけ？にも載ってるよ」
「しかもその原因が私怨なんてな。ハジメも災難なこった」
「あ？うっさいな！今すぐでてけ！」
「あ、そういえば自己紹介してなかったな。オレは天龍型軽巡洋艦一番艦、天龍だ」
「同じく天龍型軽巡洋艦の二番艦、龍田よぉ。よろしくねぇ」
「龍田さん、殺気は抑えてください」
「ごめんねぇ。提督さんを落とした犯人だって分かってるからねぇ」
「で。何でここにいるんだ」

「監視兼脅しよ」
「ああ、何か変なことをしたら……分かるな？（薙刀を構えながら、ドスの効いた声で）」
「そうね、地獄を見るわよ？（同じく）」
「ひえっ、天龍さん、龍田さん、怖いのです……」
「あー、で、誰？」
「陸軍所属、強襲揚陸艦、あきつ丸であります！今回、監視に参加させていただきます！よろしくおねがいするであります！」
「……陸軍と海軍って仲悪いんじゃなかったのか？」
「……ノーコメントであります」
檜山は天龍と龍田に怯えている。
天龍と龍田はクズを見る目で檜山をみている。
七人は部屋から出た。
「で、夕立。これからどうするんだ？」
「監視から降りても良いっぽい？」
「いいんじゃないかな、なのです」
「おう、良いぞ」
「ありがとうっぽい！じゃあ司令官と合流しに行くっぽい！」

「え、ちょっと早いんじゃないのかな……」
「問題ないっぽい！司令官さんに呼んでもらえば良いっぽい！」
『確かに』
　一方その頃。
「誰だこいつ」
　後のユエと出会っていた。
「助けて」

　そしてエヒトは。
『レ級には勝てなかったよ……（消滅）』
　レ級ちゃん大・勝・利！
「レッレレレ～（どうしよっかな～）」
「レレ？（うん？）レッレレレ、レレ、レッレレレレレ！（諸悪の根源はブチのめしたし、提督さんでも待とうかな～）」
「レ、レレレレレ……レレ！（で、でも、ただ待つのは面白くないからな……そうだ！）」
「レレレレレレレレレレレ！（自分から向かっちゃおう！）」

レ級襲来！

電が、夢を見ている。
「うーん……司令官さん……逃げて、なのです……」
「……電？どうしたのだい？悪い夢でも見たのかい？」
「響ちゃん……笑わないでほしいのです」
「うん。絶対笑わない」
「……レ級がこの世界の神らしきものを倒して、司令官さんに向かって来ているのです……という夢を見たのです」
「……そりゃあ笑えないね」
でも、あってほしくない。
でも、司令官さんと同じで、よくあたる。
「どうすればいいかわからないのです。でも、当たると思っているのです」
いや、当たらない。
当たるはずがない。
そもそもレ級がこの世界に来ることが出来るはずがない。

そう考えていると、悲鳴が聴こえて来た。
「きゃー！」
「化け物だ、化け物が来たぞ！」
化け物？魔物ではないのか？
私…響は、電と一緒に外を見た。
すると。
レ級が居るではありませんか。
……えっと。窓の外にはレ級がいる。
…なんで？
まさかの電の夢が大当たりしたの？
いやいやいや。流石にあり得ないってば。
と、考えていると、扉がスパーン！と開かれた。
「窓の外見たっぽい？」
「……うん。レ級がいるね。夢かな」
「……残念ながら夢じゃないっぽい。ほっぺた引っ張ってみるっぽい。痛かったっぽい」
「……いたい。で、夢じゃないのが分かったけど、どうするの？今ここにはというか行動

できるのは私たち駆逐艦しかいないよ?赤城さんと加賀さんは寝てるだろうし、空母がいないから制空権取られ放題だからほぼ無理だよ?」
「……確かに。じゃあどうすればいいっぽい?私たち艦娘にしかどうにかできないっぽい。でも……」
「流石に無理だね。今行っても大破するだけだと思うよ」
「時雨ちゃん、夕立は雪風ちゃんと島風ちゃんを呼んでくるっぽい。あと、一隻空母がいたっぽい」
「……あ、瑞鶴さん!」
「私が呼んでくるのです。榛名さんも。響ちゃんはみんなを頼むのです」
「じゃあ」
「駆逐艦　響」
「駆逐艦　電」
「駆逐艦　時雨」
「駆逐艦　夕立」
「「「抜錨します（っぽい）（なのです）（するよ）!」」」
「ぽい〜、大変ぽい、レ級が来たっぽい!今すぐ出るっぽい!」
「ゆ、夕立ちゃん!?」

「窓の外見るっぽい！時雨ちゃんたちが引きつけてるっぽい！電ちゃんは瑞鶴さんたちを起こしてるっぽい！」
「……分かった！駆逐艦　雪風、抜錨します！」
「島風ちゃん！起きるっぽい!?」
「分かってる。　駆逐艦、島風！抜錨します！島風が、一番早いんだから！」
「榛名さん！起きてなのです！レ級が！」
「え……ほんとだ。分かりました。戦艦　榛名、抜錨します！」
「瑞鶴さん!?」
「……何事……え、なにこの騒ぎ？なんで艤装展開してるの？」
「レ級」
「…把握した。　空母　瑞鶴、抜錨よ！」
「夕立ちゃん、連れて来たのです！」
「電ちゃん、こっちも終わったっぽい！」
「陸でも艦載機は発艦出来るよね？」
「出来てたでしょう。私が来たからには、安心しなさい、五航戦」
「……加賀さん!?」

対レ級作戦

目標、敵戦艦、レ級の排除。
戦力
駆逐艦　電
　　響
　　時雨
　　夕立
　　雪風
　　島風
空母　　加賀
　　瑞鶴
戦艦　　榛名
果たして、この戦力でレ級を追い払うことは出来るのか?

対レ級作戦、開幕なのです！

……む。やっぱり不味いのです。
戦力が軽いのです。
……摩耶さんが気づいてくれたらな、なのです。
「アハハ、ネエアソボウヨ。ジャア、カクレンボデモスル？ソレトモ、オニゴッコ？」
……やっぱり狂ってるとしか思えないのです。
電たちには、なにが目的なのかはわからないのです。
だけど、目的が良くないことであるのは分かるのです。
「第一次攻撃隊、発艦してください！」
赤城さんが艦戦などの艦載機を発艦させています。
「アハハ、イイヨ！ジャア、アソボウ！ダカラ、ジャマナモノハ、オトシテオカナイトネ！」
しかし、パタパタと落ちていきます。
レ級は、最悪の敵なのです。
誰が呼んだか、

「暴虐の姫君」。
そう、呼ばれているのです。
「……」
赤城さん……
分かっていてもやはりきついですよね……。
「ウーン、ムズカシイナ。ドウヤッテアソボウカ」
そして、レ級の一番ヤバイところ。
それは、遊び感覚なのです。
まるで、子供のようなのです。

「ネエアソボウ？ソコノチャパツノコ。カンガエゴトナンテシテナイデサ。……アソンデクレナイノ？マアイイヤ。ツギハアソボウネー・ソレジャ、コノコトアソンデタラ？」
レ級はそう言って去っていったのです。
困惑している北方棲姫を残して。
「……」
『……』
「エット、カエッテモイイカナ？」

「それは構わないのです。だけどどうやって帰るのです？」
「……ア」
『……』
「えっと、一緒に来るっぽい？」
「イイノ？アリガト！」
（どうやら害する気は無さそうなのです）
（もしくは困惑していて分かっていないか）
（……今生み出されたばかりなのかっぽい）
「えー、作戦は成功？でいいのです？」
「それでいいと思うっぽい。じゃあ解散っぽい！」
（結局この北方棲姫どうするの？）
（どうしようっぽい）
とんでもないことを行きやがったのです。
ところでこの北方棲姫、上手くすればこっちにつかせることが出来そうなのです。
ほっぽちゃんと呼ぼう、と決めたのです。

一方その頃。奈落にて。

「なんだこのサソリ！硬い！」
「硬いなら、割れば良いんですよ。来て。北上さん」
「お、やっとだね。重雷装巡洋艦北上、出る！」
「……誰？そして、どこ？」
「でもさ、どうすれば良いの、この魚雷」
「サソリいるでしょう？」
「うん」
「装甲が厚いでしょ？」
「うん……まさか？」
「魚雷を投げたら？」
「壊れるね」
「そういうこと」
「そっかー、そういうことか……ってええええ？魚雷を投げる？」
「聞くところによると、魚雷を投げずにそのまま使うユウダチ＝サンがいるとか」
「成る程。分かった。四十門の魚雷は伊達じゃないからね！（ヤケ）」

オルクスでの死闘

なんやかんやあって、私達はオルクスの最下層へとたどり着いた。
本来ならヒドラが待っているその場所には……
戦艦ル級×2
重巡ネ級
空母ヲ級×2
駆逐イ級
がいた。
……駆逐イ級はともかく。他がね。
「あー。ハジメくん達は適当な場所に隠れてて？……アレは魔法とかでどうにかなるものじゃあないから」
「え……」
「さて。久しぶりの出撃よ？
第一艦隊、編成。
旗艦　【正規空母　赤城】【加賀】【蒼龍】【飛龍】【翔鶴】【重雷装巡洋艦　北上】

第二艦隊、編成。
旗艦【戦艦　金剛】【駆逐艦　雪風】【時雨】【響】【重巡洋艦　摩耶】【軽巡洋艦　神通】
以下、12隻、抜錨せよ！」
『了解！』
「しれえ、なんですか？」
無言で深海棲艦を指差す。
「あー、分かりました、しれえ！雪風、頑張ります！」
「司令官、流石にヤバイね。成る程。この編成のわけが分かったよ。……でしょ？」
「そうだよ。駆逐艦が貴方達なのも分かるわよね？」
「幸運艦…だからでしょ？」
「そう」
「こっちも色々あったけど、また後で」
「第一次攻撃隊、発艦してください！」
「鎧袖一触よ、心配要らないわ」
「二航戦攻撃隊、順次発艦お願いします！」

「友永隊、頼んだわよ！」
タコヤキが空を舞う。
それはこちらでも落とされるが、摩耶の対空によってほぼ落とされ、制空権を確保する。
そして、こちらの爆撃によって、イ級とネ級が沈黙する。
残り、ル級二隻とヲ級二隻。
「バーニング、ラーブ！」
金剛が弾着観測射撃で正確にル級一隻を沈める。
ル級の砲弾が雪風に迫る……が、持ち前の勘と運で避ける。
ヲ級が艦載機を放つが、摩耶が落とす。
「ヲ級フラレとかじゃない限り、摩耶様には敵わないぜ！」
……流石対空番長。
「艦隊をお守りします！」
「ウラー」
「……当たってください！」
「時雨、行くよ！」
それぞれが砲弾を放ち、ヲ級を二隻とも中破させる。

そして爆撃によってもう一隻のル級も沈む。
雷撃戦、開始。
「四十門の魚雷は伊達じゃないからねえ！」
北上、響、時雨、神通、雪風が酸素魚雷を放ち、轟沈させる。
「敵艦隊沈黙。戦闘終了しました」
「了解。戦闘用具納め。戻ってください。あと、うーん、赤城、時雨。ユエちゃんに説明おねがい。金剛は後で書いておいて。響、上の状況を説明して」
『了解！』
「司令官。上…地上のことだよね？端的に言うと
檜山が軟禁刑をうけた。　電がブラックになった。夕立がソロモンの悪夢モードになった。時雨も毒舌モードになった。
……つまりみんなに……檜山にキレてる。あ、間宮さんの羊羹で治ったよ」
「……そう。檜山は？」
「夕立達いわく、なんでこんなことされなきゃいけないんだ、早く出せ、俺は悪くないばっかり言ってるって。時雨いわく、檜山には失望したよ。少しは反省するかと思ったのにだって。さんざんな言われようだね」
私は時雨と同じことを思った。

反省すれば出してもらえるかもしれないのに。
「軟禁ってどんな状態？」
「ご飯が部屋に来る、トイレは部屋の中。まあ部屋から出さないってこと。窓にも鉄柵を嵌めてるよ。刑務所よりも酷いんじゃない？……まあ営倉よりはマシなんじゃない？ちなみに決まるまでは営倉に入れてたよ」
「なるほど。いい判断だね。立案者は？」
「電」
「なんとなく分かってた。電は私関係のことになると遠慮しないからね」
「司令官、このあとはどうするんだい？私たちとしては帰ってきて欲しいんだけど」
「うーん、分かんない。そもそもここから出てどこに出るか分からないし。……あ、おにぎり使ったから」
「……え。まあ司令官が作ったんだからいいんじゃない？」
「電によろしく言っておいて」
「分かったよ。スパシーバ」

鈴奈の考察と反逆者

「あ、司令官。言ってなかったことがある。レ級が出た。気をつけて」
「え……？嘘、でしょ……なんで、レ級が……」
「それは分からない。レ級が去ったとき、北方棲姫を置いていった。その子は全く分からないようで、攻撃して来なかった。だから捕まえて、こっち側になるように教育している。味方になると思う」
「……ええ……」
「それじゃあね、司令官。また後で」
……え、北方棲姫が仲間になった？レ級が出た？ちょっと待って、情報を整理しよう。
レ級が襲撃してきたのが地上の方、おそらく数日前。で、すぐに去って行った？で、その時ほっぽちゃんを置いていった……おそらく生み出したんだろう。そうしないとまっさらなのは納得いかない。そして、こっちにはそれなりの艦隊が来た。
ここから考えるに、レ級がこの世界の神を乗っ取るなり消滅させるなり倒すなりして神になりかわったんでしょう。問題は、どうやってこの世界に来たのか、だけど。
……もしかして、深海エネルギー？　深海エネルギーは、独自のエネルギー

で、現在あるどのエネルギーよりも効率が良く、深海棲艦はそのエネルギーと沈められた怨念がドッキングして生まれた深海怨念と海を守るという意思によって誕生しました。艦娘はそのエネルギーに強いですが沈んでしまった艦娘はそのエネルギーに弱くなってしまい、深海棲艦となる。ドロップは、深海棲艦が沈んでいく際、深海棲艦が元艦娘の場合、深海怨念が剥がれ、艦娘へと戻る。深海棲艦は、そのエネルギーを使用して動いているという独自の設定です。

深海エネルギーは、とてつもないわ。だってレ級とかを動かせるのですから。

多分、たくさん集めて、凝縮させてブラックホールとかどこでもドアみたいにしたのでしょう。

まずないだろうけど。

それでもイマイチ進んでいないんですよね。深海エネルギーと深海怨念の研究。

深海棲艦は豊かな海を守っているらしいけど、こっちも豊かな海を守り、解放するためなのよね。

難しいことは分かんないし。

つまり深海棲艦は怨念の力動くんだけど、そんなのどこにも無いし。

むう。

大体深海棲艦と艦娘どっちが先か論争があるのよね。

原初の艦娘も海から出てきたのだし。
私は、深海怨念に囚われたものが深海棲艦に、地球を救う意思がついているのが艦娘だと考えているのよね。
……もういいや、分かんなくなる。
「あ、星さん」
「え？どこ？」
「……鈴奈さん」
「……ハジメくん？なに？」
「この先に何かあるようです。行ってみましょう」
「あ、うん。ありがとう」

電と夕立と雪風と響と時雨

鎮守府に戻った僕たち。

考えているのは、もちろん深海棲艦のことだ。

「うーん、どうやってこっちの世界に来た…来れたんだろう」

僕がそうポツリと言う。

レ級もそうだし、艦隊のこともそうだし、元の世界でも深海棲艦は謎が多い。

「もしかして、深海エネルギーかも…ううん、きっとそうだと思います！」

雪風が言う。雪風は直感がすごいからきっとそうなんだろう。

「…でも、どうやって？どうやって来たの？エネルギーを使ったとしても、謎が多すぎです。それに、レ級が北方棲姫・ほっぽちゃんを産み出したのも謎です。あの北方棲姫は味方と考えて良いのでしょうか？」

そういうのは神通さん。

「…でも、そんなことを言っていたらきりがないよ。時雨、雪風。それに神通さん。間宮さんに羊羹貰いに行こうよ。その後は、夕立と電のところに行こう？…神通さんとは別れるけど」

「「響ちゃん!!」」
『間宮さん、羊羹ください！』
「あら、時雨ちゃんに響ちゃん、それに雪風ちゃんに神通さん！…ごめんなさい、今は羊羹ないのよ。伊良湖の最中ならあるわよ」
『え！伊良湖さんの最中!?レア物じゃないですか！ください!!!』
「はい、どうぞ。神通さんには三人分ね。川内さんたちと食べてね。…時雨ちゃんたちには…」
「えっと…8人分お願いします！」
（夕立、暁ちゃん、雷ちゃん、響ちゃん、電ちゃん、僕、雪風ちゃん、あきつ丸さんで8人っと）
「ええ、解ったわ。…はい、どうぞ」
『ありがとう（スパシーバ）、間宮さん！』
「ふふ、どういたしまして」
「暁、雷、一緒に最中食べないかい？食べるなら檜山部屋前にきて」
「響、言われた通り来たわよ。最中って伊良湖さんのなのよね」
「…暁が行くっていうから」
「え？雷が行きたいっていうからでしょう？」

「…」
「ぽーい、響ちゃんたち久しぶりっぽい！最中が食べれるって聞いたっぽい！」
「え？なんで夕立がここにいるのよ？私達だけじゃないの？」
「ぽい？夕立だけじゃなくて時雨ちゃんや雪風ちゃん、あきつ丸さんもいるっぽい！いっぱいいるっぽい！」
「…みんないるね。じゃ、始めようか」
「やったあなのです！伊良湖さんの最中、久しぶりなのです！…うーん、やっぱり美味しいのです～」
「…この餡は…なるほど、うぐいす餡ですか！美味しいノデあります！」
　餡は粒、こし、うぐいす、白の４種。
「ぽい！白餡っぽい！とっても美味しいっぽい！」
「…美味しいのです。だけど、夕立ちゃんたちはずるいのです！電も司令官さんに会いたいのです！」
「「「電…」」」

再会の時

…はあ。疲れた。精神的にも、肉体的にも。
情報を整理しよう。

…まず、レ級が来たのが数日前の朝。そして、夕立たちが追い払った……いや、自分から帰ったのか？がその日の昼。そして北方棲姫を生み出して帰っていった、か。
…深海棲艦は謎が多い。だけど、その謎が更に深まった…レ級は深海棲艦の中でも異質。《暴虐の姫》と呼ばれているだけはあるわね。
なにせ、魚雷を打てる戦艦…航空戦艦だったわね、が他に居るわけないわ。むしろもっといたら、もうとっくのとうに私達は…っとと。…考えないようにしましょう。
そして、からっぽの北方棲姫。…いつ艦娘たちに牙を剥くかわからない、というのが不安点ね。
そして、おそらくレ級がこちらに艦隊を送ってきた、か。十中八九レ級のしわざね。
…考えたくないけど…まさかレ級が神になにかしたんじゃないでしょうね？…もしもその場合、多分戦うのは私達。そしてレ級はとてつもなく強い。勝てるのかしら。

いえ、勝つしかないのよね。
……この考察を共有するのも込めて、もうそろそろ、合流してもいいのかしら…。
…帰った場合のメリット。直接情報共有できる。
デメリット。ハジメたちの成長を間近で見ることが出来ない。
…うん。帰ったほうが良いわね。
「ねえ、ハジメくん、ユエちゃん。話があるの」
「なんですか、鈴奈さん」
「私も聞きたい」
「私は、一度王城に帰る」
『え』
「え、いや、なんでですか鈴奈さん！危ないですよ！」
「…同意」
「何故かというとね。そろそろ電が限界っぽいから。…あと間宮さんの羊羹が恋しい」
「……」
…だって！間宮さんの羊羹美味しいんだもん!!　そして伊良湖さんの最中も食べたい!!
「お土産、ちょうだい」

「ああ、そうだな。此方でも、間宮羊羹は有名だからな。食べてみたいと思っていたところだ」
…よし。OKっと。
私達は、外へ出た。そして、私は合流へ、ハジメたちは攻略へと動き始めるのであった。
「あ、そうだ。無線機」
「え…なんで僕にこれを?」
「連絡用」
「…なるほど」
「……じゃあ、行くね。気をつけて」
「鈴奈さんもお気をつけて」
…よし、行くか。
ここ何処?
っと、無線しなきゃ。
「こちら提督。大淀、迷宮から出れたからそっちに行くわ。けど、現在地が分からなくて」
「…え? 提督!?…分かりました。そうですね…夕立か電を呼び出して案内してもらうの

はどうです？」

「なるほど！ありがとう大淀！じゃあ切るね!!」

…そうだな…どっちを呼び出ししようか。

閑話：鈴奈の独白

…私は、誰かを犠牲にして生きている。

妹…麻莉奈（まりな）は、小さい時から妖精が見えていた。

…私はそうではなかった。だから、親は麻莉奈を溺愛していた。

私は、妖精が見えなくても構わなかった。だって私は、そういうのには向いてーおねえちゃん。わたしはおねえちゃんが提督になって良かったと思うな。

え？わたし…ううん。私。私は、妹のほうが提督に向いている。今でも、そう思ってる。

そんなことないよ、おねえちゃん。わたしはそう思ってる。わたしがちからをかしているのも、わたしがそう思うからだよ。

それでも、私は自分に自信を持てない。多分、それはわたしのせい私の所為だから。っつ、そんなこと、ない！わたしがわるいの！

あの、暑い暑い夏の日。あの日に、全てが変わった。

あの日は、忘れられない。麻莉奈のちからが分かってしまった日だから。

…そう。きっかけは、些細なことだった。
ただの姉妹の会話。それだけの、はずだった。…そう、だったのだ。
「おねえちゃん。聞いて」
「お姉ちゃんで良いなら」
「あのね。最近夢が、現実になるの」
「え？」
「本当なの！お願い、信じてよ！」
「信じるけど…」
…もし。もし、麻莉奈が力に気づいていなければ。私は、先生をしていたんだろうか。
私の持つ力は、全てが麻莉奈のものなのだから。
麻莉奈、ごめんなさい。私なんかがお姉ちゃんで。麻莉奈が死ぬときに庇えない、駄目なお姉ちゃんで。

ああ、あのとき、私が代わりに死んでいれば、良かったのかもしれな
おねえちゃん!!わたしはそんなこと、思ってない！むしろ、おねえちゃんが生きていて良かったっておもってる！だから、そんなこと…言っちゃ、ダメ!!

ふと、気配を感じた。この気配は、麻莉奈の？

…ああ、ダメだ。全く、分からない。どうすればいいのか、どうしたら、いいのか。
どうやって、レ級の襲来を防げば良いの？
…全く、分からない。力も、働かない。
どうやって、レ級を倒せば良いの？
私たちの力では、手も足も出せない。
……分、からない。分からない分からない分からない分からない分からない分からない!!
ねえ。一体どうすれば良いの？どうすれば、いいの…
私には、分からないよ…
お願いだから、助けてよ…
もうこの際、私達を召喚しやがりやがったクソ神でも構わない。
一体、どうすれば良いの？
どうすれば、この窮地を突破出来るの？
どう、すれば、どうすればどうすればどうすればどうすればどうすれば

良いの？お願いだよ。教えてよ、助け、てよ

再会。

…うん。両方にしよう。その方が良いはず。
「来て、電、夕立」
どこからともなく、二人が飛び出して来た。…なんかちょっと表情が暗いかな？
駆逐艦　電。
私の初期艦で、ずっと私を支えてくれていた。佐世保鎮守府のエースでもある。
駆逐艦　夕立。
着任後の初建造で建造された、私が着任してからの電以外では一番の古参。
二人とも、長い付き合いの艦娘だ。
「ぽい！久しぶりっぽい！」
「司令官さん！会いたかった…なのです！」
「久しぶり、夕立、電！なんで呼んだかっていうとね、城に帰りたいんだけど、道が分からなくて困ってて。案内してほしいな～って」
「「分かりました（っぽい）（なのです）！」」
「ありがとう、二人とも」

それから、私は二人に道案内されて、城に着いた。
「…え？鈴奈、さん？…どうしてここにいるんですか？」
そういったのは、雫ちゃん。なんか雰囲気変わった気がする。
「えっと、色々あって」
「…とりあえず、訓練場に行きましょうか。今なら、光輝たちが訓練してるはずだから」
…光輝くんか。どう変わったんだろう。
「光輝。鈴奈さん帰ってきたわよ」
「え！？鈴奈さんが？…分かった」
…なんかだいぶ変わった気がする。
「あ…えっと…鈴奈さん、お久しぶりです」
「あ、うん……」
何があったんだろう。

と。

「しれえ！おかえりなさい！」
「…雪風？！」

「司令官」
「時雨…えっと、これは?」
訓練場の一角。そこには、ごめんなさいと書かれた看板が建てられ、強制土下座マシーンで土下座されている檜山がいた。
「提督。気にしたらいけません。多分龍田か天龍がやったんでしょう」
いや違うという龍田たちのツッコミが聞こえた気がする。
…多分あきつ。
「…機械を作ったのは明石たちでしょう…多分。うん。私は何も見なかった。うん」
…部屋に戻ろうっと。
「じゃ、訓練頑張って」
「え…ちょま」

…光輝くんがなにか言ってるけど気にしない!気にしないったら気にしない!…天龍たちが檜山を回収しているのは見なかったことにしよう。うん。…光輝くんがまともに成ったようで良かった良かった。…光輝くんの胃、大丈夫かな。

「…帰ってきた！」
「…司令官、お疲れさまっぽい！」
「…司令官さん。お疲れさまなのです。…いきなりカオスを見せてしまってごめんなさいなのです」
「あ～、うん。それは良いけど。何があったか、聞かせてもらえる？」
状態把握は重要だからね。うん。報連相をしっかりしないとあんなふうにカオスになっちゃうからね。